



長楽寺02



金地院

ビワの葉に経文を書いて火にあぶり、それを患部にのせる

5月6日、がん患者の集いであるがんサロン「ホ・オポノポノ浜松」が行われた。

今回は、ビワ療法の発祥の寺、禅寺の金地院(こんちいん)を訪ねた。先々代の住職がビワ療法をはじめたところ、全国に広がった。ビワの葉に経文を書いて火にあぶり、それを患部にのせるという方法で、「金地院療法」として、全国から治療に訪れる人が増えた。自然療法で著名な東条百合子さんなども、学びに来られた。結核で苦しんでいた若き日の山田無文老師もここで得度された。河野文英住職にびわの葉療法のことをお聞きして、縁側で昼食をとらせてもらう。

ビワの葉を火にあぶって体を擦ったり、温灸や野草茶も

ついで近くの高野山真言宗の長楽寺を訪ねた。創建が平安時代という歴史が古く、小堀遠州の庭のあるとても風情のあるお寺だ。尼僧の吉田真誉さんが、温かく迎えてくれた。

部屋をお借りして枇杷の葉療法の実践を行った。まず、ビワの葉を火で炙って体を擦る。これがいちばん簡単なやり方で、体が温まってとても気持ちがいい。

次に乾燥したヨモギを揉んでモグサを作り、切ったニンジンの上のせる隔物灸を行った。ヨモギを両手で揉むことで、香りが楽しめる。手のツボ(労宮)の刺激にもなる。さらに、温めたコンニャクをびわの葉の上に乗せて、からだに乗せる。コンニャクの温かさは格別だ。さらには、よもぎ茶なども味わった。

分かち合い、実践の場がお寺で行われることにも意義が

こうした民間療法、代替医療は、「これが正しいやり方」とかいうものはない。いろいろと試して、自分の体で体感していくのがいちばんよい。体が心地よいと感じられるところを見つけていく。そこがおもしろいと思う。

葬儀や法事の場合だけではなく、こうした分かち合いの場、実践の場がお寺で行われるというところにも、意義があると思う。



長楽寺01